

△その43▽

布引——市が原——天狗道——摩耶山頂——一軒茶屋——宝塚

山登りは美容に最適ね

ハンス・エンジニア／& ケセニア・ブリゲツサー



甲山を望む地点で

もなら布引を七時四十五分に出ると三時には宝塚に着いています。

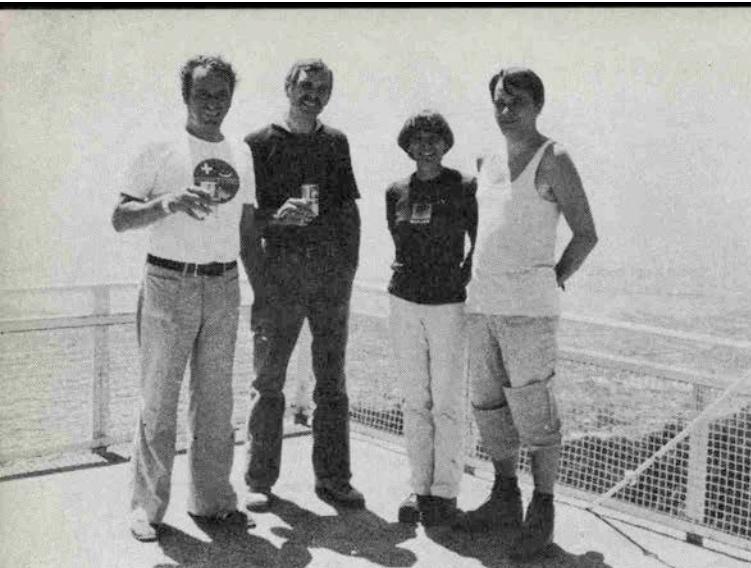
私は主人は毎朝五時三十分から山を歩いています。布引の茶屋まで行くんです。そこで、ゆっくりと新聞を読んで、いろいろな人との会話を楽しむ。殆んど年寄りですね。若い人は滅多にいません。みんないろんな話をしています。健康についてやら花の肥料についてやら、面白い話に耳を傾けながら、紅茶とトーストで朝食をとります。私は砂糖一つ、ミルクなし。主人は砂糖もミルクもなし。言わなくつてもちゃんと用意してくれるんです。常連ですからね。家へ帰るのは大体六時四十五分です。

(実は今回の取材をお願いしたとき、朝は何時でも結構ですよ。五時でも六時でも、といわれてドキッとしたものだが、結局、八時に新神戸駅でとなった——なるほど、毎朝早朝登山をされているのだから朝早いのは苦にならないわけだ。そのかわり就寝も早く、取材の前日は九時寝ましたということだった)

私も主人も日本へ来るのは山登りの習慣はなかったんです。主人と結婚をした年に日本へ来て、神戸に住んで十七年になりますが、山へ登るきっかけは神戸へ来たからです。山がすぐ近くにあるでしょう。近くにあるのに登らないのはもったいないし、それと、山の上には何があるのだろう、という好奇心もあってのことです。それで初めは布引の貯水池まで、それから摩耶山まで、そして六甲山までとだんだんと伸ばして行つたんです。

(梅雨入り宣言も間近かな或る日、折からの新緑のなかをハンス＆ケセニア・ブリゲツサー夫妻と六甲山を歩いた。ハンスさんはスイス人。神戸でエンジニアとして活躍されている。ケセニアさんはユーロピア人で魅力あるレディ。実は山道を歩きながら日本語の堪能なケセニアさんから話を伺い、記事としてまとめるというのが編集者の魂胆だったが、中味をあけてみるとまったくそれどころじやなかつた。とにかく足が速く、歩くというよりも「飛んでる」という形容がぴったりで、ついて行くのがやつとという有様であつたのだ……)

今回のコースのうち、布引から摩耶山頂までは私の一番好きなコースです。トレーニングコースとしても最適ですよ。道はきついですが、普通、一時間三十分で山頂まで行けます。休憩は途中で十分ほどが一回だけ。六甲山頂へ出るとクルマが多くて、もう、厭ですね。いつ



左よりガイザーさん、ブリゲッサー夫妻、ブリスさん（奥摩耶山頂にて）ガイザーさんとブリスさんは共にスイス人で毎土曜日奥摩耶まで歩くそうだ。

山へ登るのは第一健康にいいですね。私も主人も山登りを始めてずっと元気になりましたよ。プロポーションの維持のために絶対にいいですね。筋肉も強くなる。（普通 中年の外国人女性というとビア樽姿を連想しがちだが、ケセニアさんは実にスマートで、無駄なゼイ肉がまったくない。その秘訣が山登りにあるのだ。世の女性諸氏、たまには六甲山を歩こう。実際、二人の後から歩いていると二人とも足が勝手に歩いているような軽やかな感じでまったく憎らしいほどなのだ）

私は今の季節はジーンズとTシャツで行きます。えつマニキュアですか。ええ、マニキュアもしています。主人はいつも笑うんです。バカみたいだ、見る人もいないのについて。でも、私はだらしないのは嫌いなので、山へ登るときもいつもキッチリとして行くのです。自分のためにキチンとするのです。もち論、主人のためにもね

（普通 中年の外国人女性というとビア樽姿を連想しがちだが、ケセニアさんは実にスマートで、無駄なゼイ肉がまったくない。その秘訣が山登りにあるのだ。世の女性諸氏、たまには六甲山を歩こう。実際、二人の後から歩いていると二人とも足が勝手に歩いているような軽やかな感じでまったく憎らしいほどなのだ）

私は今の季節はジーンズとTシャツで行きます。えつマニキュアですか。ええ、マニキュアもしています。主人はいつも笑うんです。バカみたいだ、見る人もいないのについて。でも、私はだらしないのは嫌いなので、山へ登るときもいつもキッチリとして行くのです。自分のためにキチンとするのです。もち論、主人のためにもね

（笑）。これも習慣ですよ。

（もう一つ驚くことがあった。お二人とも殆んど途中で食事をとらないのだ。布引—宝塚間三十五キロの長丁場で休憩をたっぷりとったのは一軒茶屋だが、ケセニアさんはそこでサンドイッチを一片、また、ハンスさんはうどんを一杯とっただけ。あとは飲みもの、それも大ていはホットコーヒーで、これは冷たいものを飲むと身体を冷やすから、ということだ）

私は毎朝布引の茶屋で紅茶を飲むだけで、帰ってから果物とオートミールで食事をします。主人は一軒茶屋でビールを飲みました。そこからは宝塚まで真っ直ぐな道だからです。ただ私はタバコを喫うんです。で、いつも主人におこられるんです。タバコを喫ったら山へ行きなさい。都会は空気が悪い。山へ行って新鮮な空気を吸いなさいってね。私は元来少食なんです。黒パン、外米、それとオレンジ、グレープフルーツ、リンゴなどの果物をよく食べます。主人はサカナも食べますが、ステーキは余り食べません。夏場はラム、チキン、野菜、そしてスイスのチーズ。でも年とともに甘いものが好きになりました。主人もそう。私はケーキをつくるのが楽しみなんですよ。

（九月にはスイスへ戻り、三週間ほど滞在の予定。この機会にスイスの山へ登る計画がある。もち論、初めてである）

今回歩いたコース以外では、須磨—菊水山—鍋蓋山—再度山のコースもきついけれど面白いですね。充実感、満足感が得られます。六甲全山縦走はまだなんですが、これは冬に行きたい。六甲山の四季では冬が一番好きです。空気がさわやかで、雪を見るのが大好きなんです。布引貯水池へも朝六時頃行きますと、北京ダックがいっぱいです。二月頃、神戸ゴルフクラブのあたりは雪がいっぱい積っていて静かで、冬だけ歩いているとあたたかくて気持ちがいいものですよ。ちっちゃな山小屋に雪が積っている風景は私の大好きなものなんですね。

△その44△

阪神芦屋—大谷茶屋—地獄谷—ロックガーデン—風吹岩—雨ヶ崎—東お多福山—登山口バス停

六甲男性美・女性美

塚本佳治 △日本自然保護協会観察指導員・いこいの山岳会会員△

・六甲100コス



風吹岩にて筆者

本日、梅雨入り宣言。明日の山行中止。ところが、一夜明けるとカラカラ天気。編集子より「ゴオー」のサイン。あたふたと阪神芦屋へ馳せ参じる。

大谷茶屋直行。ここにて衣裳を整える。目前に「金玉大明神」の石柱。「ナンの大明神」「ワシや知らん」。休日には足の踏み場もない茶屋だが、今日は名物関東煮も鍋だけで人気なし。高座滝の岩に取りつけられている、クライマーの先輩、藤木九三氏のレリーフに黙礼(このあたりシーズンには順番待ち)。ロック銀座中央稜を横目に、地獄谷へと下る。さあ高度を稼ごう。滝とまではゆかないような落差の小滝、ミニ滝をよじ登り、這い上り少しシャワーも浴びて、七つも越えたかな、愛称「小便の滝」へ到着。「ここでそうめん流しをしたら美味そう」との声が出る。ぼちぼち口より胃の方が黙っていな様子。オサエでオサエで。聞き流して歩く。これを右

に曲がり、一人通れるほどの廊下状に突き当たる。星なお暗く頭上よりシダ蔽い被ふさり「ちょっととした探険隊気分」とS氏。通り抜けた所、右手にウマイ水場あり。ここで丁度時間となりました。G.I.ストーブに火を点ける。味噌汁の湯気、バーベキューの焦げる匂い、アンドにぎり寿司。和洋折衷のランチだ。「デザートは密柑の罐詰のシャーベット。顔の綺ろんところで「ホナ行カラ」。

A懸岩(Aケン)を後に、右のBケン尾根へ這い登る。このあたり、雪山シーズンには、足にアイゼン、手にビッケル、肩にザイルとトレーニングの若者達で賑わう。私も毎冬アイゼンワークの御世話になる所でもある。谷の様相は一変し、ロックガーデンの全貌が見える。北に万物相、墓場と風化侵食された、花崗岩の異様な景色。荒々しくそり立つもの、大、小剣の如く林立しきヨロキヨロ前後左右の風景に目を奪われながら、痩せ尾根を行く。騙しのきかない足腰の移動も慎重に、通れそうもない岩と岩とのかすかな隙間を、ブルドーザの如く、強引に突進する女性軍。そのケツ圧で削り取られた痛々しい岩肌に目礼。

B懸岩(Bケン)前の広場を左へ廻り、万物相の裏から、ピラーロック尾根へは、砂走り状をズルズルと一登り、墓場の横へ飛び出す。乱杭歯のように乱立する岩峰。「誰かの顔に似ているわ」「色んな顔に見えるね」「観音様みたい」S氏「イースタ島の石像だ」。ワイワイガヤ



ゆるやかなスロープがつづく裏おたふく山にて

ガヤ、風吹岩にて小休止。芦屋浜の超高層住宅、西宮ヨットハーバーを後目に「サテお多福デツカ」と歩き出す。ゴルフ場の猪よけの柵も過ぎ、カントリークラブ好意の水道栓のある所で小休止。「日の陰るまで休みましょうか」。少しバテたかな。「これを登るとお多福が見える。今日の登り終了」。元気をつけながらやつと雨ヶ峰。ヤ

ヤツ、頂上への道は木の階段がビッシリ。「何んでこんなとこ階段つけるんや」ボヤキ、そして少しオコり出した女性軍。

雨量計のあたりか、「ヤー」「マーアー」モクモクと先行していた女達の嬌声。今迄の突兀とした荒々しい男性美と対称的に、青い天鵞絨を敷き詰めたような、女性的な山のうねり（六甲山唯一の秩父古生層の珪質頁岩の高原）。東に赤い屋根青い屋根の奥池。ヨーロッパムードに浸り、高原のロマンに大阪より遠来のMさん「六甲にもこんな所があるのね」。写真屋S氏はシャッターをバチバチ。だが南に目を転じると、草原の大半から荒地山へかけて、ゴルフ場に削り取られ、北は最高峰の悪名高きアンテナ、西お多福山の四本柱がのし掛つて来る。イヤダイヤダ。青青青一色をノンビリノンビリと、ピークを三つ四つ頂上へ。五十二年四月、この場所で山火事にあり、折りから西風に煽られ、煙に巻き込まれ、転がるよう下山した時のことが、フット脳裏を過る。火の元御用心。ズンズン下ると生々しく焼けた傷跡、元の姿に戻るのは何時のことか。山に登り、山で遊び、山を愛する方々に、御願いしたい。一人一人の小さなマナーが、ゴミをなくし、山を荒らさない。

ススキが原状の所で、今を盛りのウツギの群落に見送られ、蛇谷から一路登山口バス停へと下る。

今日は平日のせいか、山屋と一人すれ違つただけで、コンチワ一郎も、ゴクロウサン虫もいない、静かな静かな、御機嫌な山行きでした。



福祉のこころ

坂井 時忠△兵庫県知事▽
橋本 明△家庭養護促進協会事務局長▽
司会／西条 遊児

増田 光吉△甲南大学教授▽
村木 高美△ボランティア▽

今月は、去る六月十五日サンテレビで放映された「五二〇万人の兵庫——ふくしのこころ」の座談会から要点をまとめてみました。

★『物』から『心』の時代へ

司会 福祉も兵庫県が善意の日を制定した頃とだいぶ変わってきたのでしようか。

知事 制度などは変わった点があるとしても、お互いが幸せになるため助け合っていくという気持ちに変わりないと思います。昔と比べて物質的には豊かになりますから、物質的な助け合いよりも心の通う家庭づくりや地域づくりの方が大事になってきたといえましょうか。

司会 物だけでなく、心が大事な時代へと変わってきたんですね。さて、増田先生は最近アメリカから帰国され、日本とアメリカの福祉風土の違いのようなものを感じられましたか？

増田 アメリカではボランティア活動をするということが大変高く評価されていますね。裏返しにいいますと、何もしない人はバカにされる。社会のために何かをすることは高く評価されて、自分もそれで満足しているという面が日本とだいぶ違うように思いましたね。

橋本 私は民間の立場から親運動をしていて、新聞やラジオで「親のない子を育てて下さいませんか？」と呼びかけるとかならず何人かの人たちが「私が引きとつてあげましょう」と申し出て下さったり、資金に困っている

ると見知らぬ人たちから寄付や励ましの手紙が届けられたりするのですが、こういう仕事をしていますと、今の世の中にはまだ人間の善意や思いやりの心というものが満ちあふれているような気がしますね。その思いやりが日常の生活の中で隣人へ向けられれば一年三六五日が善意の日になると思うのですが。

司会 日本人はそういう善意を外に出すのがへたなよう

に思いますがどうしてでしょうね。

増田 社会の中にそういう善意の気持ちを受け入れるしぐみがうまくできていないこともありますね。気持ちをもつと気楽に、素直に出せるしぐみがあつていいと思いますね。欧米には宗教的な伝統もありますが。

村木 私は大学一年の時からずっとボランティア活動を続けており、障害者の「希望の旅」にもボランティアとして参加させていただいていますが、みんな何かやりたいと思っていても、気はすかしいとか、いいカッコしてると思われたりするから気軽にやりにくんですね。何かちょっとしたキッカケがあればやれるんですが。

★『福祉のこころ』はみんなのもの

司会 ところで、ボランティアというのはどういうものなんでしょうか。

増田 これは私の考えなのですが、四つほど特徴をもつたものだと思うんです。

第一は原則として無償の奉仕。第二は身内のものに対してでなく、公のものに対する奉仕。第三は寄付などで

はなく、自分の身体を動かしてする活動であること。第四は継続的な活動であること。この四つを兼ねそなえた

のがボランティアといつていいのではないかと思います

橋本 私がアメリカでボランティア活動をしていた時に同じグループに二十歳ぐらいの脳性マヒの女性がいて、

彼女は知恵遅れの子どもたちの施設へ学習指導にいて、たんです。それを見てショックを受けましてね。私の頭

の中には、脳性マヒの彼女は福祉のサービスを受けける側の人間であって、サービスを提供する側の人間ではないと思いつこんでいたんです。福祉というのは与える側と受ける側とに分けるような形のものではないということを改めて思い知られました。他人のしあわせのために何かをするというのが人間の喜びでもあります。他人のしあわせのために何

なんですね。

知事 お年寄りは一般に保護を受ける立場にあるよう言われます。しかし、兵庫県の老人会のみなさん、子どもたちの施設のお手伝いをお願いしたら大変喜んでやつてくださるし、子どもたちも本当に喜んでくれています。お互いに励まし、助け合うなかに、いろんな生甲斐が生まれてくるんですね。

村木 障害者と接していく中、仲良くなると彼女が障害をもつていて私が障害をもっていないというような意識はなくなつて、たまたま私の友達が障害をもつてているから車イスを押して町へ出ていくとか、手話で話をするんだ、という気持ちになりますね。

増田 福祉というのは特別に自分たちの生活と分けて考えるようなものではないんですね。誰だって老人にはなるし、事故で障害をもつかもわからない。ですから福祉のここにいるものを誰もに自覚してもらうことが大切ですね。

橋本 外国で福祉工場を訪れるとき、かなり重度の障害者でも、それぞれの障害に合わせて造られた機械を操作して仕事に取り組んでいる姿を見かけますが、それは人間を機械に合わせるのではなく、機械の方を人間に合わせるという考え方なんですね。それは一人一人の人間のしわ寄せを個別的に考えていかなくてはできないことで、この考え方方が福祉の思想を支えているようです。

知事 人間時代、まさに人間中心でなければなりませんに共通した大事なものはやはり福祉でしようからね。村木 私も地道に肩を張らず、ゆっくりとボランティアとしての活動を続けていきたいと思っています。

司会 これからもお互いにがんばってよりよい地域づくりをしていきましょう。

左から西条遊児、坂井知事、増田、橋本、村木のみなさん
(写真/兵庫県広報課提供)



・神戸のファッショントレーナー〈JAVA〉

今の桃は形だけ綺麗

細川数夫社長に聞く



若々しい細川社長

白壁に緑の屋根の、メルヘンに
出てくる家のようなJAVA本社
ビル。最上階の社長室は斜めの天
井と大きな窓からの緑の街がとて
もファッショナブル。ジャバファ
ッションを感じながら細川数夫社
長にお話しを聞いた。

—JAVAは創立何年目になりますか。

細川 十七年目です。学校を卒業
したのはちょうど就職難の時代
で、入社できたのがオールスタイ
ルだったんです。まだ生田神社傍
の四疊半程の小さな事務所で、フ
ァッションとの関り合いはそれ
らですね。

—ニットからスタートですか？

細川 JAVAは布帛からです。
その頃はまだ単品志向で、ブラウ
スはブラウス屋、スカートはスカ
ート屋と分かれているのが普通だ
った。紳士物ではトータルファッ
ションメーカーでVANとかJU
Nがあったのです。婦人物でもト
ータルファッショングできないか

と。新しい傾向でしたね。

—そして今やジャバ、子供服の
ベベなど六社が集まつたジャバグ
ループに成長。若い会社のエネル
ギーですね。

細川 我々は若い企業ですから大
企業の人たちと対等であるには基
礎ベースがしっかりしてなくては
ならないと思うんです。例えば社
員の出社時間にしても、始業は九
時ですが十五分前にはみんな出で
て来ていますよ。

—若いファッショントレーナーを
訪問すると、そこで働いている人
たちはみんな生き生きとして—
女性も多いですね。

細川 うちも女性が多いし、男性
より優秀な人も多いですね。私自
身もそうなので、結婚してからの
共稼ぎも奨励しています。でも日
本の社会では結婚して子供がいて
仕事というのは、大変でしよう。
—社員教育はどういう形でされ
ているのですか。

細川 社内研修を、今年から始め

ましたが、技術や知識を教えるハウ・トゥジやなくて、精神論みたいなのが多いですね。

デザイナーでも最近は、以前より高度な知識や技術を学んできています。だけど「知識」であつて知恵にはついていない、頭の中に蓄えているだけで活用しないあるいは消化不良のままに受け売りつて形で出してしまいます。

昔、つまり大正や明治の日本人に比べると今の若い人たちには「本物」を持っている人が少ないような気がするんです。もちろん、素晴らしい人もいますよ。そこで、根底は精神論、底はそこ(笑)と思うのです。

— 与えられる物が多過ぎる時代になった、ということ

細川 ハンギリーな精神が少なくなってきたのですね。教えられる、与えられるというのじやなくて自分自身で学ぶ気持ちや姿勢が大切なわけですから。何かを掴み取つてやろうという意欲ですよ。

— 気力かしら。

細川 エネルギーね。それにリスクを持たない人もふえてきた。男と女の関係もそうじやないですか?

— えっ?

細川 大恋愛が減った、愛情が淡白になりましたよ(笑)。食物にしたって同じですが、例えば鶏とブロイラーの味



右は「ジャバ」上は「ベベ」の秋冬物

だということです。製品の理解と知識。

それと、ファッショントリの意は、ある意味で「人気商売」なわけです。ですから「何か」がなくてはならないんです。特徴、個性が必要なんですね。今は、私のJAVA

Aという意味で、私の趣味というか、個性を出している。そしてどんどん出していくこうと思うんですよ。それが、外から来た人にはJAVAの個性はほとんど、分つていただけると思います。

の違いですね。果物や野菜とか、外見は型が整つていて綺麗なんですが、内面がないというか味がない。桃にしたってそういうしよ、昔の桃は型は不揃いだったけど、甘くて美味しかったですね。

— それではJAVAの、あるいは細川社長の、おいしいところはどこでしょ。

細川 自信を持つて僕に云えるのは、ジバの商品を一番よくわかっているのは僕



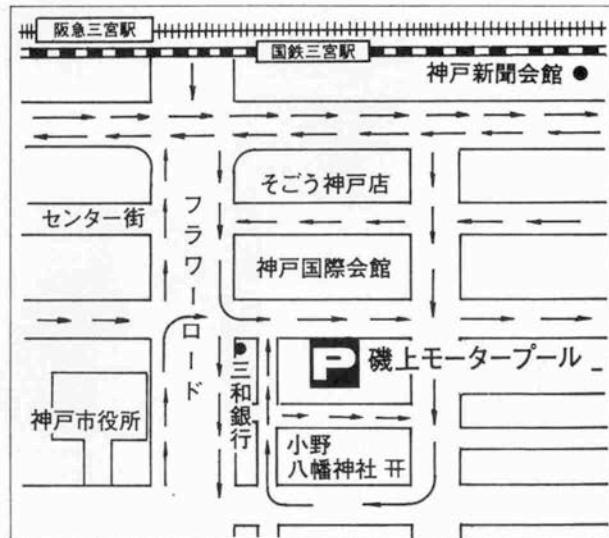


ビジネスに、ショッピングに

三宮で一番便利な

自走式立体モーターパークです

- 収容台数 300台
- 月極駐車可
- 年中無休
(8:00AM~11:00PM)



磯上モーターパーク (神戸国際会館前) TEL (078) 251-7873

★神戸ファッション市民大学OBによるグループ

<神戸のファッション都市化をめざす>

事務局／神戸市生田区東町113-1

月刊神戸っ子内TELE (078) 331-2246

● 6月マンスリーサロン

イメージとイマジネーション

講師／新井 満さん <神戸電通>

「現代は IMAGE の時代——」であります。イメージ、心像、想像、観念、そして関係ないけどイメージ（イメージのフランス語読み）というタイトルのボルノっぽい小説がありました。そういう“イメージの現代”に、広告はどういう変遷をして、そしてどんな役割を担っているのか、アルファベットアベニューの住民の Man 氏ではなくて電通マンの新井満としてのお話しでした。

PRは、イメージ広告（ほら、何となく関係ない様な様な、何の宣伝だろうって広告がありますよね）から、記事広告（広告なのか記事なのかわからない広告）、そしてタイプライターのオリベッ

ティー社やサントリーヤ、パルコのようないくつかの企業の存在自体が主張（何だか哲学みたい？）

というのが、最も新しい形。宣伝や広告だけじゃなくて社会的文化的な価値のある存在の企業だというイメージづくりなわけです。ですから広告したからといって売り上げが伸びるはずもない製鉄会社のテレビ広告なんもあるし、製作も凝っているんです。

PRということば、パブリック・リレーションの略だと考えると、広告主も消費者も棲み家は同じ「社会」という器。

そして、何故アメリカがコロンブスの発見に依るのにアメリカかを考えると（アメリカさんが見つけたそうです）“発見した！”と叫ぶこと、つまり公けに表現・発表することによってはじめて生まれる“存在”ということも。あながち金は沈黙ではないのかもしれませんよ。



例によって新井満氏を囲み記念撮影。16ミリ映写係は宮本さん。



★渡辺三船さん

<レディスワタナベ>

お待たせいたしました。三船さんちの玲奈ちゃんを初公開。みんな思わず「あっパパそっくりや」と叫びました。将来美女の約束確か、ロベルタの洋服の似合う女のになりますように……ってパパの期待も大なるところ。何年先のことか、気の早い、もはや甘いパパの三船さんであります。



パパそっくりのれなちゃん。わりとおてんばさん？元気の良い子です。

★市野木江充子さん

<市野木ニッティングスタジオ>

9月から、センター・プラザ4階で始まる朝日カルチャーセンターで、プロのニットデザイナーを目指す人たち向きの講座を持ちます。「ブランディング・トリック——ニットデザインへのプロセス——」週一回予定。教えることにも意欲満々、その準備に大忙の夏休み返上。

★中原武志さんの新住所

〒650-11 神戸市北区鈴蘭台西町5丁目6-5

電 (078) 593-7692

★横浜恵美子

兵庫のお店を閉めて息子さんと同居、楽しみで仕事は続けていくわと半隠居宣言。

新住所は西宮市今津水波町11-27 三宅俊夫様方

■ 8月マンスリーサロン

恒例六甲山Night

日時／8月23日（土）7:00～

場所／ガーデンレストラン「ホワイト・バッフ

アロー」078-891-0650 会費 ¥5000

講師／高橋 孟さん<漫画家>

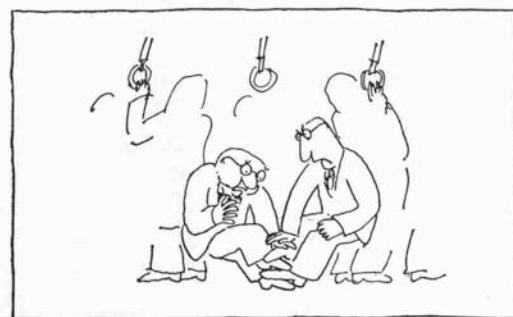
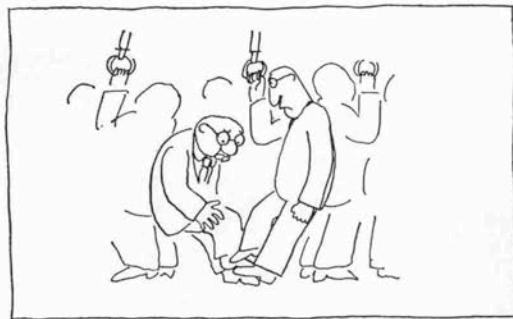
ベストセラー「海軍めしたき物語」の高橋さんを講師に、涼しい場所の夜壇で。

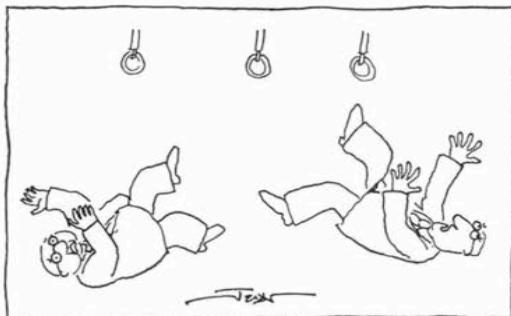
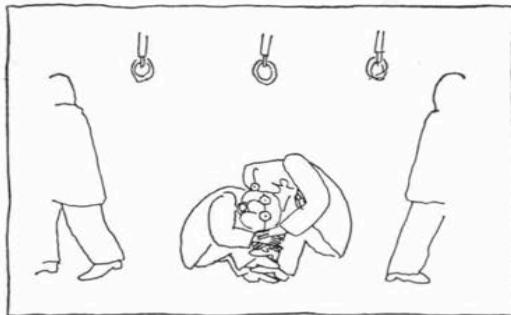
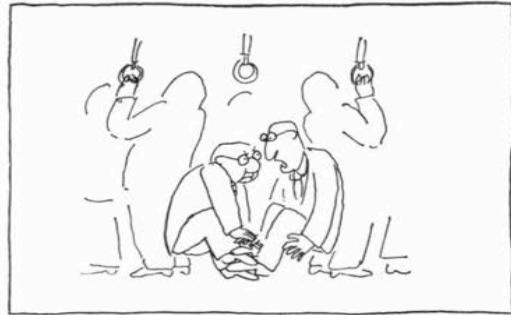
<お知らせ>

今期（55年度）より KFS 入会資格はファッション市民大学大学卒業生に限らないことに絶えで決まりました。

お問い合わせ／KFS事務局まで。

愛すべき隣人たち岡田 淳







イタリア映画のオーケストラ・リハーサル 主演のポール・ド・ヴィン・バース

私の映画手帖

32

ジャズと
オーケストラと
ウサギ

淀川 長治

＜映画評論家＞

十二の劇場は毎夜八時開演。その開演のベルと同時に場内のシャンデリアがゆるやかに消える。かくてカーテンが上がる。このカーテンの上の瞬間が演出者にとっては胸に五寸釘。ダメか成功か。ダメならいかに前宣伝がゆきとどいていようが三日ともたぬ。ざんこくに打ち切られる。成功だと三年四年とロング・ラン。

この映画は、「キャバレ」「レニー・ブルース」の映画監督ボブ・フォッサーというよりも「ダンシン…」「シカゴ」「スイート・チャリティ」「ピッピン」「キャバレ」「」のブロードウェイ・ミュージカルの舞台演出者であり舞踊振付のボブ・フォッサーのその私生活にまでくこんでゆく彼自身の伝記映画。まさにマンハッタンのブロードウェイ映画。

2

X

アメリカの「オール・ザット・ジャズ」はカンヌ映画祭で黒沢の「影武者」とグランプリをともにおくれた。しかし出来は「影武者」とくらべると数段落ちる。とは云つてもちがうるアメリカ映画のなかでは、すぐ個性をひらめかした努力作。

舞台監督のイライラが映画のなかで幻覚的に描かれてゆくのはフェリーニの「8½」のまほうで感心しないが、舞台監督のイライラ、それもブロードウェイのミュージカルの演出者（ロイ・シェイイダー）のイライラを描いているそれがまさに、マンハッタンのブロードウェイの演劇人の体質を示して、どの外国の映画でもないニューヨーク映画の面白さは持っている。ブロードウェイの三

「オーケストラ・リハーサル」これはフェリーニの一九七九年作の一時間十二分映画。キヤメラはいつものようだ。ジユゼッペ・ロトゥンノ。ついでに加えると「オーケストラ・ザット・ジャズ」もこのキヤメラマンを使用していく。さて「オーケストラ・リハーサル」とは六〇人ちかくの演奏者が指揮者の「ダ・カーボ」(はじめっから...)の声でオーケストラを始めてゆくそのままを映画にしたオーケストラ団員と指揮者の苦闘の映画、ラストは再び指揮者の「ダ・カーボ」の声で終る一時間十二分の、これはフェデリコ・フェリーニのあいも変わぬすばらしい魔術の世界。といってもこの映画はフェリーニの美の幻

想がひろがってゆく映画ではない。舞台は十三世紀に建てられたらしいという古寺。寺の中には法王や司教の墓が七つもあるようなカビくさい寺。ところがこの堂守がこの礼拝堂くらい音の反響のいいところは他にはないところが大自慢。そこでここでオーケストラのリハーサルがおこなわれるわけだ。さてオーケストラとその指揮者といえばタキシードやいかめしい黒い服の演奏者の集りを想像するのだが、この映画は古寺で日本でいうならば姫路の男、京都の女、東京の浅草のおやぢ、青森の青年といった各地でんぐんばらばらの連中が集つて指揮者が登場するまでは、今日はテレビがインタヴューリーに来るんだと張り切る者、そのテレビはギャラなしでインタヴューリーするそなうだがケシカラント怒るものの、ピアノの下にかくれて女のお客と男の演奏者がセックスしてしまうすごさ。とにかくここに描かれるものは「人間たちのオーケストラ」なのだ。ボンジヨルノ、ボノセーラ、ボナタアーレ、ケベラコーザ、ベリッシモ、アモーレ。フェリーニ映画はそのイタリア語の人間臭さから私たちをイタリアに誘いこむ。そしてこれは、ぐうぜんにも悲しくも昨年の四月十日に六十八才で亡くなった二ノ・ローターの映画音楽の遺作となつた。ほとんどすべ



アメリカ映画のオール・ザット・ジャズ。主演のロイ・シェイダー。

てのフェリーニ映画の映画音楽を手がけたロータ。「オーケストラ・リハーサル」の最初にフェリーニは（二ノ・ローターに捧ぐ）の悲しい文字を入れている。

イギリスのアニメ「ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち」（一九七九年作、一時間三十一分）。アニメのうさぎの映画と聞けば（むかしむかし可愛いウサギがいました）というところだが、どっこいこれは勝手がちがつた。

リチャード・アダムスが一九七二年に出版したこの童画の物語にマーチン・ローゼン監督（四十三才）が惚れこんで一九七五から四年がかりで完成したイギリス映画。初めてから可愛い。神がウサギの気まま勝手なふるまいに怒り、あらゆる他の動物を作りウサギを殺せと命令した。しかしそれではどうも哀そうにも思えウサギが早く逃げられるようになど足を大きくしせッポのピクピクがウサギ仲間との暗号となりあと足で地面をパタパタと叩くとそれは遠くのウサギにまでその合図がわかるようにしてやつた。これが神話時代。

さて現代にいたつてのウサギのこれは集団移動物語。安住の地を求めるウォーターシップの丘へと移動してゆく。見ようによつてはこの童画の中に（人生）（生と死）を教えられる。

女体自慰

細川 董 たなす △文とえ／哲学者▽

彼女は、ほんとにこけしそつくりの可愛い女の中では、最初会った時から彼はひそかに恋してしまった。素朴で日本の女のように古風でさえた。

もちろん、彼女は彼のあこがれの中では、バージンであった。小柄でボチャッとした色白で、丸顔でどう見ても、こけしそつくりの顔立ちだ。

その頃、彼の行く放送局へアルバイトに来ていた彼女とは、ときどき、狭い録音室で一緒になるようなことがあっても、手の早いと定評のある彼にしても、さすがにおろか、手をふれることさえ彼には出来ないのだった。それは、さわりたくないというのではまったくなかつた。話はまったく逆である。

本音はさわりたくて、抱きしめたくて仕方なかつたのにくちやくちやに、もみくちやにしてしまいたいのだが、願望があまりに強烈すると、逆に、現実には反比例してまったく女に手も足も出さないというのが、男というものがかもしれない。

これが男のロマンといえ、月並みすぎる。

それほどに彼女は古風で、ひかえ目すぎるほど古風なコケシ人形そつくりに、超ひかえ目だった。それは、人間という名のけだもの血など流れていくよとは思えぬ神聖さにあふれていたのだ。

そんな彼女が、約一年ぶりにディスコ・パーティの案

内状を持つてスタジオへ現われたのである。

昨年放送局のアルバイトをやめて彼女は目下花嫁修業中なのだ。

「久しぶりに大阪へ出て来ました。部長さんにぜひディスコ・パーティに来てくださるよう、あなたからもいってくださいね。私、神戸にボーカフレンドもないし」

と彼女は、あいにく出張中の部長へのことづてを彼に托して帰つて行つたのである。幸いなことに部長は

「君もぜひひついて来給え」

と命令してくれた。

彼は、部長のお供をして行つたパーティだったのに、部長はひとしきり彼女と踊るとさつさと帰つてしまつた。

「後は、君にたのむよ」

といい残して部長が消えてくれて初めて、彼はほんとうに生まれて初めて大好きなコケシ人形の手をにぎることが出来たのである。そればかりではない。その中にストーテンポの曲が始まると、彼女を抱きしめることさえ出来たのである。

短時間ではあったが、中年男の部長のなすがままにゆきついていた。

男の嫉妬の炎が彼をもやし始め、部長にさえあそこまで許すのならと思うと、彼は彼女を和歌山へ帰す気持ちが失せていた。踊りながら彼は尋ねた。

「もう十一時だけど」「…………」

にバスへ入ることにした。



こけし人形の白く
ぱっちやりした裸身
をつめたいシャワー
でひやし、バスでよ
く洗ってから一応ベ
ッドまで両手に抱き
かかえてやっと到達
した時は、何ともか
んともヘタヘタと彼
はベッドへ倒れ込む
ところだった。

しかし彼女は、疲
れを知らなかつた。

「もう一度抱いて！」

と彼女は求めたのだ

ら出てまたも三回、都合一晩で六回、彼は彼女のお相手
をしたのである。それでも、何とかお相手出来たのは若
かったからだ。今の彼ならぬめである。翌日、午後目を

さましたとたん、彼のこわい母親の怒声が飛んで來た。

「あなた、ゆうべどこへ行つてたの？」
彼女の母親が外泊した娘から一部始終を聞き出し、婚
約者のいる娘をよくも、もてあそんでくれたわね！」と、
電話があつたというのだ。彼はぐうの音も出なかつたが
憧れの彼女に婚約者がいたなんて、初耳だつたと、暗い
気持ちになつた。

今でも、大人のおもちゃの店の前を通るたびにショ
ウインドウの電動こけしをちよろつと横目で見て、彼は
こけし女を想い出すのである。

「あなた、A: 感覚それともV: 感覚？」
と質問してくる始末！ V: 感覚と答えるひまもなく、彼女
はつづけざまにトリプルヘッダーであった。長く憧れて
いたからこそ彼も彼女の苛こくな要求にこたえられたと
いふものだ。

彼は、何とか彼女の燃えづける火を消さねばと一緒
にバスへ入ることにした。

「オリエンタルホテルへでも泊つて行く？」「………」
しばらく沈黙がつづいた後、「ええ」と彼女の返事がか
えつて來た。

「家へ電話しなくていいの？」

と、彼は念を押したが、彼女は「かまわないのである。
勝ち誇った自信がにわかに彼に湧いて來た。つい
にヘッド・インした。彼女の燃え方は異常であった。
彼のアヌスをさえ彼女は指先で愛撫し始めたのである
あの虫も殺さぬこけし女が、である。おまけにくすぐ
つたがる彼に

「あなた、A: 感覚それともV: 感覚？」
と彼は念を押したが、彼女は「かまわないのである。
勝ち誇った自信がにわかに彼に湧いて來た。つい
にヘッド・インした。彼女の燃え方は異常であった。
あの虫も殺さぬこけし女が、である。おまけにくすぐ
つたがる彼に

「あなた、A: 感覚それともV: 感覚？」
と質問してくる始末！ V: 感覚と答えるひまもなく、彼女
はつづけざまにトリプルヘッダーであった。長く憧れて
いたからこそ彼も彼女の苛こくな要求にこたえられたと
いふものだ。

彼は、何とか彼女の燃えづける火を消さねばと一緒
にバスへ入ることにした。

● 地域文化のネットワーク

月刊 旅行アサヒ

有名書店で好評発売中!!

定価 780円 (送料160円)

年間購読料 9,360円

旅の味わい、旅のこころ、旅本来のあるべき姿…を求めて、
全国のタウン誌が連帶してつくるユニークな旅の文化誌

北海道「ふるさと十勝」東北「タウンライフとわだ」「会津嶺」東京「週刊きちじょうじ」「街角」神奈川
「江ノ電沿線新聞社」静岡「豆州かわら版」長野「松本情報」奈良「マイ奈良」石川「金沢おあしす」兵
庫「月刊神戸っ子」高松「ナイスタウン」高知「暮らしの便利帖」宮崎「宮崎春秋」沖縄「青い海」



●地域の新鮮な情報を満載●

8月号では――

- 特集/信州・松本そして安曇野
- 卷頭インタビュー/森 敦
- 対談「旅三昧」/陳舜臣 VS 梅原猛
- スケッチの旅・パリの陽だまりから/竹谷富士雄
- 日本の旅情・神話の里山陰「出雲路有情」/植田正治
- 大伽藍巡礼/比叡山延暦寺
- 表紙/早川良雄

9月号予告 8月15日発売予定

- 対談/園伊玖磨 VS 朝比奈隆 ●表紙/鶴居玲
- 卷頭隨想/井出孫六 ●瀬戸内讃歌/緑川洋一
- スケッチの旅/佐藤忠良 ●私の視点=中国・杭州/尾島俊雄

●お申し込み、お問合せは――〒650 神戸市生田区東町113の1 大神ビル7F 月刊 神戸っ子内旅行アサヒ係 ☎078-331-2246